

仏教説話における因果応報

——『今昔物語集』本朝仏法部にみる——

沼 波 政 保

はじめに

仏教説話には、種々の話がある。縁起譚・靈驗譚・出家譚・往生譚・因果応報譚等々、説話の世界は広い。

本来、説話は奇異なるがゆえに、珍奇なるがゆえに、語られるものである。しかし、そのような世俗説話と異なり、仏教説話は何らかの教理を説こうとする意図を持つ。従って、その説く教理の内容を吟味することによって、仏教説話をいくつかに分類することができるわけであり、従来、多くの先覚たちによってなされている。

『今昔物語集』についても、多くの方たちが、その所収説話の分類をしておられるが、その中、国東文麿氏⁽¹⁾のそれが、今日では大方の了解するところとなっておりと思われる。氏は、『今昔物語集』について、その説話展開の様相を二話一類様式と捉えられとともに、その組織については『三宝感應要略録』との関連を中心に、詳細な検討を加えられている。

そこにおける分類に対しては、御説の通りであり、何ら異を唱えるつもりは毛頭ないが、そのように分類される仏教説話の底にかくれている、共通のものがあるのではなからうか。その共通なもの一つに、因果応報思想があると考え、それを確かめ、そのことがいかなる意義を持つのかについて考えてみたい。しかし、今は紙幅の関係から、その対象を『今昔物語集』⁽²⁾本朝仏法部に限って、以下論ずることにする。

一

卷十一第一話は「聖徳太子、此ノ朝ニ於イテ始メテ仏法ヲ弘メタマヘル語」である。聖徳太子の生涯を語るのであるが、冒頭に太子を紹介した後、「初メ」から始めて、太子生涯の逸話を「亦」の語を連発して語り継いでゆく。太子に関する多くの書物から採り込んだわけであるが、国東文麿氏は卷十一の第一話から第十二話までを「本朝仏教渡来展開の諸説話（聖徳太子より智証大師まで）」と捉えられる。本話は、そういった位置づけの中において、わが国に仏教が伝来した時の様子の、それに与って功あった太子の逸話を語るものであり、そこに因果応報の相を見出すのは難しい。しかし、いくつかの太子の逸話の中には因果応報思想をみることができる。すなわち、仏教が伝えられた際の、太子・馬子と守屋たちにまつわる話である。百濟からもたらされた弥勒の石像を、蘇我馬子が寺を設けこの石像を供養し、すべて馬子と太子が仏法を弘めた。ところがそのうちに国内に病気がはやり、死ぬ者が多く出た。この時、物部守屋と中臣の勝海の王が帝に奏するという。

我国、本ヨリ神ヲノミ貴ビ崇ム。然ルニ、近来、蘇我大臣、仏法ト云物ヲ発テ行フ。是ニ依テ、国ノ内ニ病発テ、民皆可死シ。然レバ、仏法ヲ被止テノミナム、人ノ命可残キ。

ここには、元來神を崇むべき我国において仏法を崇めたがゆえに、国内に病いが起り多くの死者が出たのだという因果としての捉え方がみられるのである。

守屋たちの奏上によつて帝が仏法を禁じられた時に、太子は

此二ノ人、未ダ因果ヲ不悟。吉キ事政テハ福忽ニ至ル、惡事ヲ政テハ過必來ル。此二ノ人、必ズ、過ニ会ナムトス。

と語っている。

しかし、帝は守屋をして、堂塔を破壊し、經を焼き、仏像を難波の堀へ捨て、三人の尼を追い出さしめた。その日、雲もないのに大風が吹き雨が降った。その時太子は「今禍発ヌ。」と語った。事実、世に「瘡ノ病」が起った。ここにも、仏法をおろそかに扱ったがゆえに瘡病が起ったという因果としての捉え方がみられる。

このように、所々に因果応報思想は散見するが、本話全体を通してのそれを見ることは難しい。それは、本話が太子にまつわる逸話を採り込んで太子生涯の話になっているからであらう。もちろん、馬子や守屋たちの話だけで一つの説話となりうるものであり、それらの話の中には因果応報思想をみることができるのである。

同巻の第十三話から第三十八話までは「諸寺の縁起話」、卷十二の第一話及び第二話は「起塔縁起話」と国東氏は捉えられ、後者は前者の延長上に撰しうるとされるが、これらの話も、例えば卷十一第十三話が「今ハ昔、聖武天

皇、東大寺ヲ造給フ」で始まるように、なぜ建立されるに至ったかを語らない話が多く、因果の相を語るものはない。しかし、例えば巻十一第三十話は、天智天皇の御子が狩に出かけた折、鹿を追って断涯へ至ったので、弥勒の像をその場所に刻むことを条件に助命を願ったことによって笠置寺がはじまった話であるが、刻像を条件に助命を願ったから、それが叶えられて助かったというところに因果思想がみられる。

しかし、中には因果応報思想がみられる話もみられるが、多くは先にふれたように、諸寺・起塔の縁起譚は、なぜ建立されるに至ったのかということ語らないために、因果応報思想を見出すことは難しい。このことは、国東氏が「法会縁起話」と捉えられる巻十二第三話から第十話についても同様である。

二

ところが、国東氏が「諸仏靈驗話」として捉えられる巻十二第十一話から第二十四話になると、因果応報思想のみられる話が多くなる。第十三話は、和泉国の盡恵寺の銅の仏像が盗まれたが、盗人に解体されようとする際に仏像が叫んだがために露見したという話であるが、盗人が仏像を盗んだがために獄につながれたというところに、かすかながら因果の相をうかがうことができる。

第十四話は、馬養と祖父鷹という二人の漁師が出漁中に嵐に出会い、まさに死なんとする時に釈迦仏に祈って助かるという話であるが、この話には、二人が釈迦仏を念じたがゆえに助かったという点に因果の相をみることがで

きる。最後にも

此レ偏ニ、釈迦如来ヲ念ジ奉レル広大ノ恩徳也、亦、此ノ二ノ人、信ヲ深く至セルガ故也。

と語り、さらに、

然レバ、人若シ急難ニ値ハム時ハ、心ヲ静メテ念ヒヲ專ニシテ仏ヲ念ジ奉ラバ、必ず其ノ利益ハ可有ベキ也トナム語り伝ヘタルトヤ。

と語っている。

第十五話は、貧しい女が大安寺の丈六の釈迦仏に裕福になることを願ひ、大修多羅供の錢四貫を賜わり、やがて裕かになったという話であるが、貧女が大安寺の釈迦仏に祈ることによって錢を賜わり裕福になるという点に因果の相をみることができる。やはり話の末尾には

然レバ、人貧クシテ世ヲ難渡カラムニ、心ヲ至シテ仏ヲ念ジ奉ラバ、必ず福ヲ可與給シト可信キ也トナム語り伝ヘタルトヤ。

と語っている。

第十六話は、帝が狩に出られた折に逃げた鹿を、百姓たちが知らずして食べ、ために捕えられる。そこで、百姓たち男女十余人は大安寺の丈六の釈迦仏に救いを求めたところ、俄かに皇子が誕生され、これによって赦されたという話である。難に会った百姓たちが大安寺の釈迦仏に祈ったがゆえに助かったという因果の相をみることができる。やはり末尾に

然レバ、人自然ラ王難ニ値ハム時、心ヲ至シテ仏ヲ念ジ誦經ヲ可行シトナム語り伝ヘタルトヤ。
と語る。

このように「諸仏靈驗話」には、多くの話の中に因果応報思想をうかがいうる。その中、第十一話は、修業僧の広達が橋の木の痛さを訴える声を聞き、その木は仏像に造られるはずの木であったところからあらためて仏像に造ったという話であり、因果の相をうかがうことが難しい。しかし、なぜ広達が橋の木の叫びを聞くことができたのかというと、彼が「仏ニ道ヲ求テ勲ニ修行シテ年ヲ経」ていたからであることが、文脈の流れから理解でき、ここにも因果の相がほのみえていると考える。

三

卷十二第二十五話から卷十五第五十四話までを、国東氏は大きく「諸経靈驗話」と捉えられ、さらに、卷十四の最終話までを、法華経・諸経の靈驗による「現世利益」の話として、卷十五全話を「往生話——当世利益話」として押えられ、さらに前者を経の違いによって細分類しておられる。

卷十二第二十五話は、亡くなった母の恩に報いるために法華経を書写し供養しようとした高橋の東人という者が、講師に招いたみすばらしい僧の夢を通して、家で使う牛が母の転生した姿であることを知る話であるが、この話の中にも因果の相をみることができ。まず、母の恩に報いるために法会を営もうとしたことによって、母が牛に転

生していたことを知ることができたという点、次に、乞食僧は般若心経陀羅尼を日來から読んでいたので、夢で母の転生したことを知りえたという点、さらには、この母が牛に転生したのは「前世ニ此ノ男主ノ母トシテ子ノ物ヲ恣ニ盗ミ用シタリシニ」よって「其ノ債ヲ償」うためであるという点の三点に、因果の相をみることもできるのである。末尾には、

此レ、誠ニ、願主ノ深キ心ヲ至シテ母ノ恩ヲ報ゼムト思フ功德ノ至レル、……（中略）……亦、乞者、年來、陀羅尼ヲ誦シテ功ヲ積メル驗也ト、見聞ク人皆、讃メ貴ビケリ。

と語る。

卷十三に入ると、大峯の持経仙（第一話）・比良山の仙人（第二話）・陽勝（第三話）等は法華經を持したがゆえに仙となったのであり、ここにも因果の相をみる事ができよう。

また、卷十三第四十三話は、紅梅にばかり心を染めたがために死後に蛇身を受けた娘が、父母が営んだ法華八講を聴聞したことによって往生したという話であるが、紅梅に執着したがゆえに蛇身に転生したという点、法華講を聴聞することによって往生したという点に因果の相をみる事ができる。

卷十四に入ると、蛇身となった無空律師を救った枇杷の大臣（第一話）、仇同士であり、蛇と鼠に転生した二人を救った信濃守（第二話）、共に蛇に転生した道成寺の僧と悪女が救われた話（第三話）、金に執着したがために蛇身に転生して、後救われた女（第四話）等々、その救われた理由が法華經の力である話が並ぶ。これらの話は法華經の靈驗譚にはちがいないが、視点をかえてみれば、法華經を読誦したり書写したりすることによって転生の身から

救われたと捉えることができ、そこに因果の相をみることでできると思われる。

卷十四第二十六話は、丹治比の経師が法華経を書写した際、雨宿りをしに堂内に来た女と契ったがために死んでしまった話だが、法華経書写という清浄な時に、しかも寺という清浄な場所において、女と契ったがために、死を招いたというところに、因果応報の相をみることでできるのである。

卷十四第三十話は、大伴忍勝が死して後、生前に書写していた大般若経の功德によって蘇生する話だが、これも、大般若経を書写していたことによって蘇生したのであり、因果の相をみることでできる。つづく第三十一話も同様である。

このように、法華経をはじめ諸経の靈験の話のほとんどに因果の相をみることでできるのである。

国東氏が広く「諸経靈験話」として捉え、それを二大別されるうち、後者の「往生話——当世利益話」と類別される卷十五の全五十四話は、氏も「凡そは法華経をはじめとする諸他の経の受持（読誦・書写等）によっての往生という靈験獲得の説話」であると述べておられるが、「諸他の経の受持」がなされたがゆえに往生を得るのであり、やはり、因果の相をみることでできるのである。

例えば第一話は、元興寺の僧頼光は「諸ノ経論ヲ披キ見テ、極樂ニ生レム事を願ヒ」、「此レヲ深く思ヒシニ依テ、物云フ事无」く、「只弥陀ノ相好・浄土ノ莊嚴ヲ觀ジテ、他ノ思ヒ无クシテ静カニ寢」て「年来、其ノ功積」って浄土に生れたのであり、智光も「仏ノ相好・浄土ノ莊嚴」を一生の間觀じたので往生を遂げたのである。因果の相をみることができるのである。そのほか、第十話では、比叡山の僧明清は念仏三昧に日を送ったがために往生を得た。

第二十話では、信濃国の如法寺の僧葉蓮は日夜阿弥陀經を読み、弥陀の念仏を唱えて怠ることがなかったがゆえに極樂に往生した。第三十話では、美濃国僧葉延は法師の姿ながら狩漁を仕事にしていたが、毎夜法華經を誦し念仏を唱えていたがゆえに極樂に往生した。第四十話は、尼僧の釈妙は戒律を持し、身を清らかにし、法華經を誦し念仏を唱えたがゆえに極樂に往生した。第五十話では、藤原氏の女は日夜に念仏を唱えて怠らなかったがゆえに極樂に往生した。因果の相をみるのである。

四

卷十六及び卷十七について国東氏は、卷十六の全話と卷十七の第一話から第四十一話までを「諸菩薩靈驗話」として、卷十七第四十二話から第五十話までを「諸天靈驗話」として、それぞれを捉えておられ、さらに両者を細かく分類されている。両者は共に「靈驗話」であり、「諸經靈驗話」と同じく、因果応報思想を話中に見出すことは容易である。

前者の「諸菩薩靈驗話」のうち、卷十六は全話が「觀音靈驗」である。第一話は、行善という僧が高麗国へ渡ったところ、唐に滅された時であって誰も居ず、途方にくれた行善が大きな河を渡ろうとしたが橋もなければ船もない。人が追いかけてくるような気もし、困った行善はただ觀音を念じたところ、老翁が船に乗ってあらわれ、それによって彼は渡ることができたが、陸に上ってみると老翁も船もみえなかったので、觀音が助けてくれたことがわ

かったという話である。この話も、観音を念じたがゆえに河を渡ることができたという因果の相をみることができるのである。

第十話は、貧女が穂積寺の千手観音に祈請したことによって錢百貫を得、やがて裕かになったという話である。

第二十話は鎮西から上京する途中、賊に出会った女が、観音を念じたことによって夫と共に助かった話であり、第三十話は、京の貧女が清水の観音に祈ることによって御帳を得、それによって幸せになる話である。第三十八話は、文忌寸が観音の悔過を行う導師をのしったがために変死するという、前述の話とはやや趣きを異にする話であるが、末尾部分には

此ヲ見聞人、「打ツ事无シト云ヘドモ、惡心ヲ発シテ、監ニ法師ヲ罵リ、令恥タル故ニ、現報ヲ得ル也」ト云テ、憎ミ謗ル事无限シ。……（中略）……亦、此レ、観音ノ悔過ヲ行フヲ来テ聞ク人ヲ妨ル過也トナム語り伝ヘタルトヤ。

とあり、因果の相をはっきりとみることができる。

卷十七のはぼ三分の二を占める「地藏靈驗」についても因果の相をみることができる。例えば第一話は、生身的地蔵に会うことを願って地藏菩薩にねんごろに仕えた僧が願いを叶える話であるが、末尾に

然レバ、難キ事也ト云フトモ、心ヲ発シテ願ハバ、誰モ此カク可見奉キニ、心ヲ不発ザル故ニ値ヒ奉ル事无也。と語るように、至心に地藏菩薩に仕えたがゆえに生身の地藏に会えたのである。

第三十三話から第四十一話までは、虚空蔵・弥勒・文殊・普賢の諸菩薩の靈驗譚であり、つづいて第四十二話か

ら末尾の第五十話までは、昆沙門天・吉祥天・妙見・執金剛神・夜叉の諸天靈驗譚である。少しくみてみると、第四十話は光空という法華持経者が、日夜の法華読誦の功と、難にあたって法華経を誦したことによって、普賢菩薩が身替りとなって命を救われたという話である。第四十六話は一人の女王が吉祥天女の像に祈ることによって裕福になった話である。第四十九話は金鷲優婆塞が執金剛神に仕えたことによって帝に知られ出家を許された話である。それぞれ因果の相をみることができるのである。

五

卷十八は欠卷である。卷十九及び卷二十は因果応報譚である。国東氏はこれをさらに細分され、「過去因現在果」・「現在因現在果」の二つを両卷それぞれに捉えておられ、また別の視点から「出家機縁説話」や「孝養・報恩説話」・「冥府受苦・蘇生説話」等七つに分類しておられる。しかし、今は、話中に因果の相を見出すことを目的としているので、因果応報説話を集めた卷十九及び卷二十は、今更何もう必要はない。

ただ、この中に因果応報譚とはいふものの、少し異った型のものがある。卷十九第六話は、一人の貧しい男が妻のために一羽の雄鴨を射て帰宅し、翌日妻に食べさせようとその夜は棹にかけておいたところ、夜中に雌鴨が夫である雄鴨の所へ来て、男が近づいても去ろうとしない。それを見て男は道心を発して愛宕護の山寺へ行って出家したという話である。つまり、この話は、殺生をしたことが機縁となって出家した話であるが、これを因果応報の面

からみると、殺生という悪因によって出家という善果を得たと捉えることができると思われる。一般に因果応報は善因善果・悪因悪果であるが、悪因善果という型をこの話にみることができるのである。同様な型は、中心主題となっているか否かは別にして、つづく第七話・第八話・第九話等にも見ることができる。

そもそも、出家譚において、その機縁となるものは、人をして無常を感じしめたり、俗世を厭わしめたりするものであり、それを因果応報の視点で捉えるとき、悪因善果となるのは当然のことといえるかもしれない。

六

如上、『今昔物語集』の本朝仏法部についてみてきた。考察において挙げた説話は任意に抽出したものであって、作為的でないことはいうまでもないが、その結果、卷十一及び卷十二所収の「本朝仏教渡来展開の諸説話」・「諸寺の縁起話」・「起塔縁起話」・「法会縁起話」の中の数話や、その他にも若干の例外が存在することを認めつつも、ほとんどの話に因果応報思想をみることができる。もちろん、因果応報思想が話の主題になっているか否かにかかわらず、話の展開の中にそれがみられるということであるから、従って、国東氏が分類されるように、主題を異にする種々の話が存在するのは、当然である。

さて、ほとんどの話に因果応報思想がみられるわけだが、それがいかなる意味を持つのであろうか。その一つの試みとして、因果応報思想を説話分析の視点として考えてみたい。

卷二十の第十五話・第十六話・第十七話は共に蘇生譚である。まず、第十五話の中に因果の相をみてみると、次の如くである。

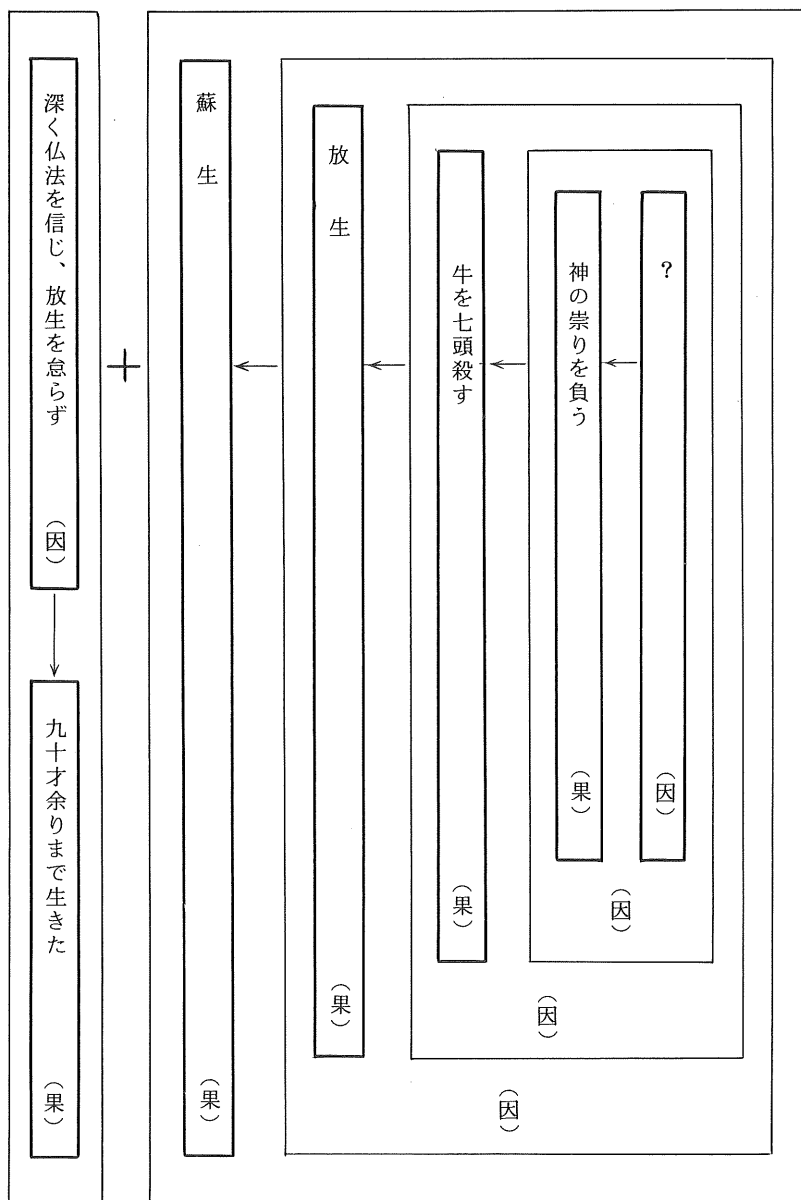
A 主人公の男が「神ノ崇ヲ負テ」それから遁れるために毎年一頭の牛を殺して七年を経たという。この「神ノ崇ヲ負」うた事について、その理由は語られていないが、普通には、なにがしかの悪因による悪果としてと考えられる。断定はできないが、悪因悪果の相をうかがえるのではなからうか。

B 毎年牛を殺すこと七年を経て重き病いを受けたという。「我、身ニ重キ病ヲ受テ、辛苦悩乱スル事ハ、年来、此牛ヲ殺セル罪ニ依テ也」と男が考えるように、悪因悪果である。

C 病いを得て七年後、遂に男は死ぬが、かつて病氣治癒のためになした放生の功德によって九日後に蘇生した。この話の主題であり、善因善果である。

D 蘇生した後、仏法を信じ、わが家を寺として仏を安置し、修行した。また、ますます放生を行じた。ゆえに九十才余りまで生き、身に病いなくして死んだ。善因善果である。

以上の四点に因果の相をみることができるが、主題はCである。つまり、放生したがゆえに蘇生したことである。この主題を中心に、なぜ放生を行ったのかを語るのがBであり、Bの中の牛を七頭殺す理由を語るのがAである。Dは後日譚であり、つけ足しと考えてよからう。こう考えると、この話は、蘇生譚としての主題から、その善因をなすことの必然性を加え、さらにその必然性を語る話の悪因について、もう一つ必然性を説明したとみることができ。図示すると次のようにならうか。



第十六話の中にみられる因果の相は次の如くである。

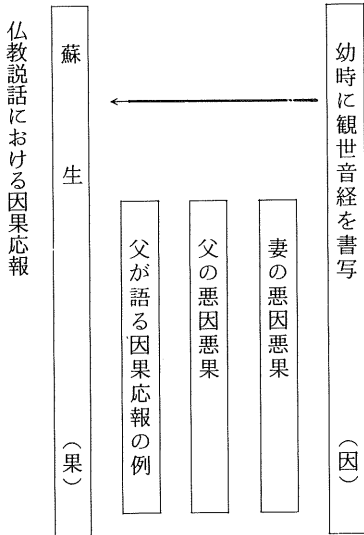
A 死んだ時の、夫広国の処置を恨んだ妻が、死後、冥途にて苦を受ける。 (悪因悪果)

B 広国の父が、生前におかした多くの罪によって冥途にて苦を受ける。 (悪因悪果)

C 冥途にて広国に父が語る多くの因果応報の例。 (善因善果・悪因悪果)

D 広国が、幼時に書写した観世音経の功德により、蘇生する。 (善因善果)

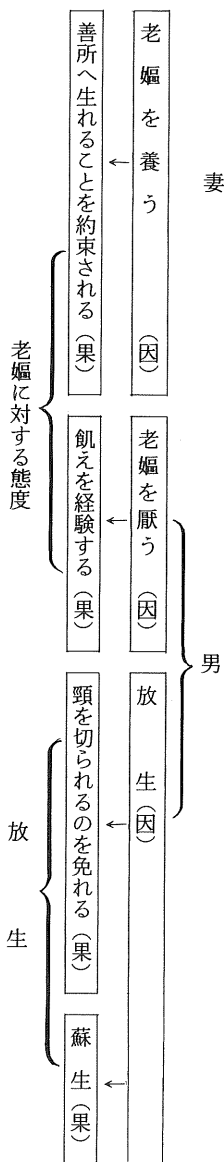
やはり蘇生譚と捉えられ、主題はDである。しかし、広国蘇生の善因は末尾に近い部分で語られているにすぎず、むしろこの話は、広国が冥途に行き、そこで因果応報の相をいくつかみることにによって、因果応報の理を知るところに重点があるといえるのであり、従ってA～Cは因果応報の例であり、並列的にあるといえよう。図示すると次の如くなるようか。



第十七話の中にみられる因果の相は次の如くである。

- A 讃岐国の男の妻は、老嫗を養う功德によって、善所に生れることが約束されている。（善因善果）
 B 男は、冥途にて頸を切られんとするが、放生の功德によって助かる。（善因善果）
 C 男は、老嫗に食を施さなかった罪により、冥途で飢えて口から焰を出すことを経験する。（悪因悪果）
 D 男は、放生の功德によって蘇生する。（善因善果）

これも蘇生譚といえよう。従ってDが主題であるわけだが、第十六話と同様、主人公の男が冥途にて因果応報の相をみたり経験することによってその理を知るところに重きがおかれていてもいえよう。つまり、A〜Cはやはり並列的にあるといえる。ただし、A〜Dのそれぞれの因は、生前の同じ時点でなされたことであり、第十六話のそれぞれの因が共に生前のことであるとはいえ、その間に関連性がないのに対して、密接なつながりを持っている。つまり、第十六話のA〜Cは、全くの例として存在するのに対して、この話のA〜Dは、一つのストーリーの上に おいてつながっているといえる。図示すれば次のようになるうか。



今は、話の展開や描写の内容その他の点は考えずに、因果の相だけを視点に三話を見たわけだが、比較してみるに、例えば、第十六話は単純な構成になっており、冥途でみる因果応報の相とストーリーとの関連性は薄く、第七話のそれぞれの因果は、それよりはややストーリーにおけるつながりが出てきている。それに比して第十五話はそれぞれの因果がストーリーの上からいって密接につながっている。つまり、構成が極めて単純な第十六話に対して、よく整った構成の第十五話、その中間に位置する第十七話と押えることができる。これから何が言えるかについては今ふれない。その他にもまだいえることがあるが、例えばこのように、因果の相を一つの視点として、話を分析することができるのではなからうか。『今昔』本朝仏法部のほとんどの話に見出しうる因果応報思想は、ほとんどの話に見出しうるゆえに、説話分析の一つの有力な視点となるのではなからうか。

結

如上、『今昔物語集』本朝仏法部について、その説話のほとんどに因果応報思想のみられることを述べてきた。そして、そのことがいかなる意味を持つかについて、ほんの一例を挙げて、少しふれた。

そもそも仏教説話が仏教の教理を訴えるものである時、そこに因果応報思想がみられるのは至極当然のことかもしれない。事実、『今昔』の本朝仏法部に限らず、天竺・震旦の部における仏教説話のほとんどにも因果応報思想がみられるし、さらにこれは『今昔』のみにとどまらず、仏教説話全体について言えることである。しかし、当然の

こととして看過するには、多くの問題がそこに含まれていると思う。

もちろん、その際、因果応報思想のみられない話にも留意しなければならないし、その割合や位置を詳述しなければならぬはずであるが、今回はふれえずに終った。また、仏教説話全体について言えると述べたが、中世の仏教説話集になると、微妙に変化して来ている。ことに『撰集抄』など、その変化は顕著である。

また、一口に因果応報といっても、善因善果・悪因悪果にとどまらず、例えば悪因善果とか、悪果を得た者のために追善をするというような、様々なパターンがあり、その点からの詳細な分析が必要なことはいうまでもない。さらに、因果応報思想といった場合、その範疇はいかなるものなのか。今は、因果の關係において語られているものをすべて含めて述べてきたが、一応その基準は作品において因果の關係として捉えられているものに置いたつもりである。しかし、その範疇は、より明確にしていかなければならないだろう。

また、この因果応報思想が話の主題とどう関わるものなのかという点も考えなくてはならない。主題よりももっと基本的なところに位置するようにも考えるが、因果応報譚として、主題の位置に捉えられる話もあり、一概に断ずることは危険である。ただ、例えば国東氏が『今昔』の巻十九及び巻二十について、因果応報譚と捉えられながらも、一方で「出家機縁説話」・「孝養・報恩説話」・「冥府受苦・蘇生説話」等、視点を變えて捉えてもおられるように捉えるならば、因果応報はそれらの話の基本的なところで捉えていけるのではないかとも思うが、今後、考えてゆきたい。

さて、今までは仏教説話について述べたわけだが、実は、世俗説話の中にも因果応報思想を見出すのは容易であ

る。説話は本来、奇異なるがゆえに、珍奇なるがゆえに語られるのであり、その面からいえば、因果の理に従わないところに成立する性格を持つものであるから、仏教説話ほどではないが、それでもかなりの世俗説話の中にも因果応報思想はみられる。それどころか、説話に限らず、例えば『古事記』・『日本書紀』や『源氏物語』をはじめ、物語文学など、ジャンルを越えた多くの作品の中にも、因果応報思想はみられる。この点に関して、今日の我々の日常生活においても、因果の関わりで物事を捉えることが多いことを考えあわせる時、それは、人間の心の根底に存在する一つの考え方ではないかという疑問が生じてくるのである。これも考えてゆかねばならないことである。いろいろ述べたが、今は、『今昔』本朝仏法部についての考察を通して、仏教説話のほとんどに因果応報思想をみることができるところを述べ、これに関連して多くの解明すべき点のあることを記して、今後の課題とし、他日を期したい。

〔注〕

- (1) 国東文麿氏「今昔物語集の構成」〔『今昔物語集成立考（増補版）』（昭和五十三年五月・早稲田大学出版部）所収による。〕以下、氏の御説はこれによる。
- (2) 『今昔物語集』は日本古典文学大系本（岩波書店）による。
- (3) 前掲書（注①）六二頁。